

国立国語研究所学術情報リポジトリ

世界の言語研究所（4） 中国社会科学院 言語研究所（中国）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2019

中国社会科学院 言語研究所 (中国)

古川 裕 (大阪外国語大学)

1. 設立をめぐる歴史的経緯

今回の「世界の言語研究所」は、中華人民共和国の首都北京市にある中国社会科学院言語研究所を紹介したい。

言語研究所は1950年6月に設立された研究機関である。中華人民共和国の建国が1949年10月1日であるから、新国家の成立後間もなく一年をおかずに設けられた、由緒ある研究所ということになる。当初は、中国科学院哲学社会科学部の所属であった。その後、文化大革命の動乱期を経て、1977年5月に人文社会科学系のアカデミーとして新たに中国社会科学院 (Chinese Academy of Social Sciences) が設けられたのにあわせて所属がこちらに移り、現在に至っている。去る1995年6月には言語研究所の開設45周年を祝うシンポジウムが開かれ、記念論文集が公刊されている (『慶祝中国社会科学院言語研究所建所45周年學術論文集』商務印書館, 1997)。

以上は言わば中国社会科学院言語研究所についての正史の沿革をたどったものであるが、更にさかのぼってその前身を求めてみると、中華民国時代の中央研究院 (1928年成立) に属していた歴史言語研究所にそのルーツを認めることができる。実際、開設初期の言語研究所の研究者層は、歴史言語研究所からの遺留組と、北京大学、清華大学、燕京大学などからの転属組という二大グループによって構成されていたという。

なお戦後、中央研究院は国民党政府の大陸撤退とともに台湾に移転し、現在は総統府直属の研究機関となっている。かくして現在では、客観的事実として、中国の社会科学院に属する言語研究所と台湾の中央研究院に属する歴史言語研究所という同じ源に発する二つの言語研究機関が併立することとなっている。台湾海峡をはさんで両国間の対立が厳しかった一時期こそ両研究所の間には一切の交流がなかったが、最近は人的交流・物的交流ともに盛んになっているとの由である。

2. 研究機構と研究成果

現在、言語研究所には下に述べる八つの研究室があって、各セクションともに中国の言語研究のフロンティアを切り拓く学術活動を活発に行っている。研究室の名称は次のとおり：

- ①現代漢語研究室 ②近代漢語研究室 ③古代漢語研究室 ④方言研究室
⑤語音研究室 ⑥応用言語学研究室 ⑦国外言語学研究室 ⑧詞典編輯室。

以下順に各研究室の研究内容の概要と主要な成果をкаいつまんで紹介することにしたい。

①現代漢語研究室

そもそも設立当初、すなわち1950年代における語言研究所に課せられた任務は、中国語の規範化推進にあったとすることができる。その時代的な背景としては、建国後間もない新中国政府にとって、共通語（「普通話」）の普及と文字改革（「簡体字」）の実施という二点が焦眉の急であったのである。

共通語の普及という政策的要求に応じて著された成果として、呂叔湘・朱德熙共著『語法修辭講話』（1951年『人民日報』に連載された記事内容を単行本化したもの）が有名である。ちなみに著者の一人、呂叔湘氏は創立以来の主要メンバーであり、1959年から1982年まで語言研究所所長の任にあった著名な言語学者であったが、去る1998年4月9日逝去、享年94歳であった。いま一人の著者、朱德熙氏（1920-1992）は北京大学中国語言文学系教授、中国言語学界きっての理論派として高名な言語学者であった。

上掲書が啓蒙的で実用的な性格のつよい書物であったのと相補的に、現代中国語の文法体系を構造主義理論の立場から記述したものとして、丁声樹ほか著『現代漢語語法講話』（1952年～1953年『中国語文』誌に中国科学院語言研究所語法小組執筆の名目で17回連載されたものを1961年に単行本化）がある。陸志韋著『漢語的構詞法』（1957、科学出版社）も現代中国語の語構成を最初に扱った著作として名高い。

なお、言語政策の立案や実施については後に新設された語言文字応用研究所がもっぱらその業務を担当することとなり、それ以後、語言研究所の任務は文字通りの言語研究に重点を移すこととなっている。（語言文字応用研究所については次回別稿において改めて紹介の予定である。）

現代漢語研究室所属の研究者によって近年刊行された共同著作として、呂叔湘主編『現代漢語八百詞』（1980、商務印書館）、孟琮ほか編『動詞用法詞典』（1987、上海辭書出版社）、鄭懷德ほか編『形容詞用法詞典』（1991、湖南出版社）などがある。このほか、個別著作や論文も数多く、楊成凱著『漢語語法理論研究』（1996、遼寧教育出版社）や張伯江・方梅著『漢語功能語法研究』（1996、江西教育出版社）、『句形與動詞』（1987、語文出版社）などシンポジウムや学会での発表論文をセレクトした論文集なども数多く編集発行している。

②近代漢語研究室、③古代漢語研究室

上に述べたような現代中国語に対する共時的な研究のみならず、中国語の通時的な研究に従事しているのがこの二つの研究室である。

古代漢語研究室は1950年代末に組織された漢語史グループが発展したもので、『古漢語語法學資料彙編』（1964、中華書局）、『古漢語修辭學資料彙編』（1980、商務印書館）、『古代漢語虛詞通釈』（1985、北京出版社）などの共同著作ほか、所員個別の著作が陸続と刊行されている。

近代漢語研究室は1977年の開設という比較的若いセクションであるが、劉堅編著『近代漢語讀本』（1985、上海教育出版社）、劉堅・蔣紹愚主編『近代漢語語法資料彙編』（唐五代卷、1990：宋代卷、1992：元代明代卷、1995：商務印書館）、劉堅ほか著『近代漢語虛詞研究』（1992、語文出版社）、呂叔湘著『近代漢語指代詞』（1985、学林出版社）、曹広順著『近代漢語助詞』（1995、語文出版社）など

理論的にも実用的にも有用な著作を数多く産出して注目されている。

④方言研究室

地域方言間の差異が大きい中国にあっては、方言研究の重要性が早くから認識されており、その具体的反映として早くも1954年には語言研究所内に方言グループが組織され、以来、フィールドワークを中心とした記述研究のみならず調査研究者の養成などに力を注いでいる。

特に、李榮氏を中心とする所員の努力によって、1979年には方言研究室が編集部となって季刊専門誌『方言』（1998年第3期は創刊20周年記念号）を創刊し、全国漢語方言学会を組織運営するなど、方言研究の実質的リーダーとして学界を牽引しているおもむきがある。

その他にも、中国の方言調査にとって不可欠の参考書として今なお後進を裨益しているものに、丁声樹・李榮ほか編『方言調査詞彙手冊』（1955、科学出版社）、『方言調査字表』（1955、科学出版社）、『漢語方言調査手冊』（1957、科学出版社）、『古今字音対照手冊』（1958、科学出版社）など一連の書物があるほかに、オーストラリア人文科学院との共同プロジェクトによる『中国語言地図集』（中文版1987、英文版1989、香港朗文出版）がある。近年はさらに、各地方ごとの詳細な『方言志』や『現代漢語方言音庫』という方言音の録音テープのシリーズを続々と刊行していることなどが注目される。

⑤語音研究室

語言研究所の開設当初から、語音研究室では実験音声学的なアプローチによって、音声分析と音声合成の研究を行っている。代表的な成果に、呉宗濟主編『普通話単音節語図冊』（1988、中国社会科学出版社）、呉宗濟・林茂燦主編『実験語音学概要』（1989、高等教育出版社）などがあるほか、近年はコンピュータとのインターフェイスを視野に入れた音声理解の研究に力を入れている。

⑥応用語言学研究室

この室名に言う「応用語言学」とは、特にコンピュータを利用した言語の応用的研究を指すもので、具体的には機械翻訳と中国語のデータ処理やデータベースの構築を主たる研究業務としている。

⑦国外語言学研究室

語言研究所では、海外の語言学についての情報収集を熱心におこない、海外の語言学界において影響力のあった論著はいち早く中国語に翻訳して、国内の研究者にタイムリーに紹介するという紹介業務を開設当初から担っている。現在その媒体となっているのが、当研究室が編集にあっている季刊雑誌『当代語言学』（1980年創刊。1998年に誌名改称。旧誌名は『国外語言学』）である。初期は旧ソ連の語言研究紹介が中心であったが、最近はやはりアメリカにおける語言研究が話題になることが多い。残念ながら、日本における最新の語言研究の動向が紹介されることはまだ少ない。同誌主編の沈家煊氏の近著に『不对称和標記論』（1998、江西教育出版社）がある。

⑧ 詞典編輯室

上述のとおり、初期の語言研究所にとっては中国語の規範化を推し進めることが主要任務であった。その一環として、語彙の規範となる中型辞書を編集することが求められ、1958年から辞書編纂のプロジェクトが開始されることとなった。その後、政治の波に翻弄され、二十年の時間を経てようやく1978年『現代漢語詞典』（商務印書館）の正式出版にこぎつけている。同書は、現代中国語について最も権威のある規範的辞書として定評があり、中国内外で2300万冊の印刷数を誇るベストセラーとなった。1995年には、改訂版の『現代漢語詞典（修訂本）』（商務印書館）が出版され、中国の内外から歓迎を受けている。

以上、八つの研究室について紹介をしたが、研究室の他に組織上は別のセクション（中国語文雑誌社）扱いではあるが、語言研究所が実質的に編集発行している学術誌『中国語文』がある。1952年の創刊で、初期は月刊、後に隔月刊となり、現在まで既に265号が発行されている。途中1966年から1977年までは文化大革命の政治動乱により停刊を余儀なくされた苦い歴史を持っている。同誌の掲載論文は、中国言語学界の最高峰にあることが保証される存在である。『中国語文』編集部は定期刊行誌『中国語文』のほかに、『語法研究與探索』（文法学シンポジウム論文集、既刊は第8号まで）、『中国語言学報』（中国言語学会論文集、既刊は第7期まで）などの編集発行にも携わっている。

また、多民族国家である中国にあって、人口の大多数を占める漢民族の言語（漢語）を扱うのが語言研究所であるわけだが、少数民族の言語や文化、歴史についての研究機関として、同じ中国社会科学院の下部組織として民族研究所が設けられていることを書き添えておきたい。組織の由来は、もともと語言研究所にあった少数民族言語研究グループが母体となっている。民族研究所では少数民族言語を研究対象とする専門誌『民族語文』を発行している。

3. 所在

本文で紹介した語言研究所および民族研究所の所在地はそれぞれ下記のとおりである。

ちなみに、中国社会科学院は日本学術振興会による派遣研究者の受け入れ機関であり、日本側の中国プロパーの研究機関とは長く良好な相互信頼関係にある。今後この友好関係がよりいっそう深まることを祈って、紹介を終えたい。

中国社会科学院 語言研究所 中国 100732 北京市建国門内大街5号

中国社会科学院 民族研究所 中国 100081 北京市白石橋路27号

(追記：本稿が成るにあたっては、語言研究所の張伯江氏より多くの情報を頂戴しました。ここに特に記して、感謝申し上げます。)